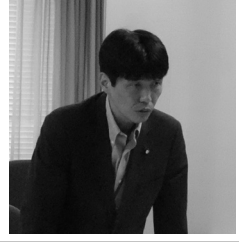


機能確認後に組織論へ

原子力委員会 見直し会議



原子力委員会の在り方見直しのための有識者会議が七月三十日、初会合を行った。山本一太・内閣府特命担当相(上写真)は、挨拶で、原子力をとりまく状況の変化をふまえた抜本的な見直しの必要性を訴え、早ければ年内にも方向性を打ち出し

たいと意欲を示した。また、座長を務める森田朗・学習院大学法学部教授は、日本は「組織ありき」で役割を論じる傾向にあるが、ここではまず原子力委員会の機能を確認し、それをベースとして組織形態についての議論をしていきたいとした。各委員の自己紹介のあ

と、内閣府が原子力委員会の果たしてきた役割等について、同委を中心とした計画的・民主的な開発・利用を推進した第一期、同委から安全規制が分離され、核燃料サイクルを推進した第二期、相次ぐ事故を経て安全規制強化・原子力利用がグローバル化している第三期に分けて説明し、意見交換を行った。また、二年民主党政権のもとで行われた有識者会議の経緯と今後の進め方についても議論した。

当時の報告書について、橋川武郎・一橋大学大学院商学研究科教授は、革新的エネルギー戦略についての記述が盛り込まれており、政治的要素の介入に注意を促し

会からのヒアリングを行う予定。寺島英郎・日本総合研究所理事長は、日米関係や世界の原子力状況との関連性の観点から不足している点を指摘した。今回の開催は八日で、内閣府から原子力委員会の所掌事務(この現状と成果、関係府省との関係、今後の必要性と課題について、近藤駿介・原子力委員長、原子力規制委員

再処理ガラス 再処理ガラス 再処理ガラス

日本原燃は七月二十六日、六ヶ所再処理工場のガラス固化設備における事前確認試験、ガラス固化試験の結果に係る報告

汚染水対策の「道筋」要望 全漁連

訂正 七月二十五日号一面「予算方針」の記事中、「原子力委員会事務局は十八日の定例会議で…」は、「原子力委員会は十七日の定例会議で…」の誤りでした。お詫の上、訂正します。

点検進む多核種除去設備

福島第一 廃止措置進捗状況

資源工ネルギー庁は七月二十五日、福島第一原子力発電所事故炉廃止措置の進捗状況を発表した。滞留水処理を行う多核種除去設備では、二十四日までに約一万九千立方メートルの処理が行われた。微量な漏えいの確認により停止しているA系統は、欠陥部の補修を施し、十月中旬より再開、B系統は、八月初旬までに停止し点検を実施する計画だ。C系統は、九月中旬にホット

原子力海外情報 サービス開始

三菱総研

三菱総合研究所は七月二十六日、アイ・イー・エー・ジャパン(IEAJ)が保有・運用する原子力海外情報データベース事業を取得し、八月六

日より新たな情報提供サービスを開始すると発表。IEAJ社は、官公庁、研究機関、企業等、多くの組織に対し、データベースを運用した情報提供の実績があり、三菱総研は、これらの事業を独占的に取得することによ

技術支援訴え 廃止措置WS

福島第一原子力発電所事故炉の廃止措置に関するワークショップが七月二十二日、関係学会共催のもと、東京大学・本郷キャンパスで行われ、遠隔操作技術や廃棄物処理などの研究開発状況に関する報告とともに、今後の課題解決への意見交換がなされた。

また、日本原子力発電の山内豊明氏は、東海発電所廃止措置の経験から、破損燃料、建屋の損

壊、汚染水の発生、周辺環境への影響といった事故炉特有の問題を掲げる

一方、熱交換器の解体における3Dモデルシミュレーション、切断技

術など、福島第一対応に役立つ知見を提案した。

また、日本原子力発電の山内豊明氏は、東海発電所廃止措置の経験から、破損燃料、建屋の損

原子力ワンポイント



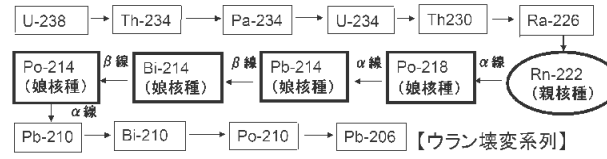
日本の放射線・放射能基準

ー福島第一原発事故(番外編25)

国連科学委員会(UNSCEAR)二〇〇八年報告によると、「大気中の天然放射性物質の吸入による年間の被ばく線量は」は日本よりも世界平均の方が約二・六倍(世界平均二・二六ミリシーベルト)に達している。これは、自然放射線の分野では、Rn222によって体外に放出される「親核種」と呼ばれるRn222の濃度が大部分が室内に滞留するということから、Rn222が線量に大きく影響しているからと推測されます。

わかった。その後もう一度じっくり、年間被ばく線量の比較表を見ていたら、「大気中の天然放射性物質の吸入による年間の被ばく線量」は日本よりも世界平均の方が約二・六倍(世界平均二・二六ミリシーベルト)に達している。これは、自然放射線の分野では、Rn222によって体外に放出される「親核種」と呼ばれるRn222の濃度が大部分が室内に滞留するということから、Rn222が線量に大きく影響しているからと推測されます。

屋内ラドン濃度が日本より数倍高い国も カワさん ラドンの室内濃度を高める主な要因には①土壌や岩石中のラジウム含有量の多さ、②建材の種類(木造住宅のラドン濃度は低め)と住居の高気密性、③換気状態(窓の開閉が多いほど室内のラドン濃度は低め)などがあります。これらの要因が重なって欧米では日本よりも室内ラドン濃度の高い国が多くなっています。詳しくは次回「中川教授は、毎日新聞(原産協会・人材育成部)



大准教授は、毎日新聞「中川のがんの時代を(原産協会・人材育成部)